# 青年期における心理的居場所に関する研究

## —心理社会的発達の視点から—

光元麻世・岡本祐子

A study on " ibasyo" (one' s psychological home place) in adolescence from the view points of psychosocial development

Mayo Mitsumoto and Yuko Okamoto

心理的居場所とは「心の拠り所となる関係性，および，安心感があり，ありのままの自分を受容される場」(則定，2008) である。本研究では，青年期を対象に発達に伴いどのような心理的居場所を持ってきたかについて調査し，心理社会的発達の視点から検討することを目的とした。研究1では，質問紙調査を行い，重要な他者に対する心理的居場所感と心理社会的発達課題の達成の関連について数量的に検討した。研究2では，半構造化面接を行い，青年が発達に伴ってどのような心理的居場所を持ってきたかについて，質的に検討した。その結果，1) 母親に対する心理的居場所感が心理的居場所の広がりや心理社会的発達課題の達成において重要であること，2) 母親に対する心理的居場所感が高い青年では，幼児期から複数の心理的居場所が見られるのに対し，母親に対する心理的居場所感の低い青年では児童期までほとんど心理的居場所がなく，思春期以降，友人や恋人が心理的居場所として機能するようになることが示唆された。

キーワード：青年期，心理的居場所，心理社会的発達

### 問題と目的

近年，社会の中に「居場所」を見出すことが人々にとっての重要な課題になったといわれる (則定，2008) 。教育現場や心理臨床場面をはじめとし，「居場所」という概念が注目を浴びるようになってきたのは，1980年代以降のことである。その背景の1つには，いじめや非行の社会問題化と時を同じくして，このころより不登校児の増加が騒がれるようになったことがある (岡村・豊田，2007) 。心理臨床の分野でも，「居場所がない」という感覚を抱く人や居場所を失ってしまった人々への心理的援助が検討されている (村瀬・重松・平田・高堂・青山・小林・伊藤，2000) 。さらに，成長発達の観点から成長過程における居場所の重要性も指摘されている。

「居場所」は，青年期の発達課題であるアイデンティティと表裏一体であるとされている。堤 (2002) は，青年期の「居場所がない」という感覚に焦点を当て，アイデンティティとの関連を検討

し，青年期の「居場所がない」という感覚の「中核に自我同一性の混乱があるのは間違いない」と指摘している。また，高橋・米川 (2008) は「居場所」とアイデンティティは表裏一体であるという立場から，「居場所」とアイデンティティとの関連を検討している。その結果，ある集団で，安心感を実感できることは初期のアイデンティティ形成されたことを示し，支えられ感，所属感を実感できることはアイデンティティ形成が進み，集団への同一化が果たされつつあることが示唆されている。また，ある集団への同一化が果たされると次の集団へと進み，アイデンティティは拡大し統合されていくとしている。

しかしながら，「居場所」とアイデンティティの関連を検討した研究では，Erikson (1950) の 8 つの心理社会的発達段階のうち，第 5 段階のアイデンティティのみを扱っており，各段階の発達課題をどの程度達成しているかという視点で捉えた研究は見られない。我々は，最初の居場所である母親を始め，発達に伴い様々な居場所を得ていく。これらの「居場所」を発達的な視点から見ていく上で，心理社会的発達課題の達成感覚との関連を検討することは重要であると考える。

そこで，本研究では，青年期を対象とし，最初の心理的居場所となる母親を始め，発達に伴いどのような心理的居場所を持ってきたかについて調査し，心理社会的発達の視点から検討することを目的とする。研究 1 では質問紙調査を行い，重要な他者に対する心理的居場所感と心理社会的発達課題の達成の関連について数量的に検討する。研究 2 では，半構造化面接を行い，青年が発達に伴ってどのような心理的居場所を持ってきたかについて，質的に検討する。

本研究では，「居場所」の中でも心理的な側面に注目し，物理的居場所とは区別して考えるため，「心理的居場所」という言葉を用いることとし，則定 (2008) にならい，心理的居場所を「心の拠り所となる関係性，および，安心感があり，ありのままの自分を受容される場」と定義する。そして，心理的居場所があることに伴う感情のことを「心理的居場所感」とする。なお，本研究では，「心の拠り所となる関係性」に焦点を当てることとする。

## 研究 1

### 目的

研究 1 では，質問紙調査を行い，重要な他者 (母親，父親，親友，恋人) に対する心理的居場所感と心理社会的発達課題の達成の関連について数量的に検討する。

### 方法

#### 1) 調査対象者及び調査時期

A 大学生 248 名 (男性 106 名，女性 142 名；平均年齢 18.35 歳，$SD = 1.76$) を対象に集団質問紙調査を行った。調査時期は，2010 年 4 月から 6 月であった。

#### 2) 質問紙内容及び測定尺度

①則定 (2007) の青年版心理的居場所感尺度(「安心感」「本来感」「役割感」「被受容感」の 4 因子，20 項目から構成される。)，②中西・佐方 (2001) の EPSI エリクソン心理社会的発達段階目録検査 (再改定版) (「信頼性」「自律性」「自主性」「勤勉性」「同一性」「親密性」「世代性」「統合性」の 8 つの下位尺度と総得点によって構成される。56 項目。)，③フェイス項目 (性別，年齢，学年)。

## 結果と考察

### 1) 心理的居場所感

#### 1-1 ) 因子分析

青年版心理的居場所感尺度 について因子分析 (主因子法・*oblimin* 回転) を行った。その結果，則定 (2007) と異なる因子が抽出された。 母親，父親に対する心理的居場所感では同様の 3 因子，親友に対する心理的居場所感では 2 因子，恋人に対する心理的居場所感では 1 因子が抽出された。母親，父親に対する心理的居場所感では，母親，父親の第 I 因子が則定 (2007) の「安心感」「本来感」の内容を含んでいた。また，母親の第II因子，父親の第III因子は「役割感」の内容を，母親の第III因子，父親の第II因子は「被受容感」の内容とほぼ同様であった。また，親友に対する心理的居場所感では，第 I 因子が「安心感」「本来感」を，第II因子が「役割感」の内容を含み，「被受容感」の項目は第 I 因子と第II因子の両方に分かれていた。

しかしながら，因子が命名しづらい内容となっているため，因子については今後検討することとし，本研究では，それぞれの心理的居場所感の総得点を用いて分析を行うこととした。

#### 1-2) 信頼性の検討

青年版心理的居場所感尺度の信頼性を検討するため，父親，母親，親友，恋人に対する心理的居場所感の総得点について，Cronbach の α 係数を算出した (Table 1) 。その結果，母親，父親，親友，恋人に対する心理的居場所感の総得点において，高い信頼性が得られた。

Table 1

**心理的居場所感の平均値と標準偏差**

| | | *M* | *SD* |
|---|---|---|---|
| 居場所感 | 対母親 ($\alpha$ = .92) | 75.45 | 15.08 |
| | 対父親 ($\alpha$ = .96) | 69.23 | 17.01 |
| | 対親友 ($\alpha$ = .96) | 79.25 | 13.57 |
| | 対恋人 ($\alpha$ = .96) | 77.99 | 16.78 |

#### 1-3) 青年期の心理的居場所感における性差の検討

青年期の心理的居場所感の各得点の性差を検討するため，*t* 検定を行った (Table 2) 。その結果，母親と親友に対する心理的居場所感では，女性の方が有意に高かった。これは，則定 (2008) と同様の結果である。一般に親友は同性で多いとされているが，女性同士では心理的居場所感が高くなると考えられる。杉村 (1998) は関係性について，関係性は男子にも女子にも重要であるが，男子は他者との競争，女子は愛着と親和というように，関係性の中でも重要な側面が異なると指摘している。このことから，愛着や親和といった関係性の側面を重要視する女性同士では，そういった側面がより強い関係性を持ち，心理的居場所感が高まっていると推察される。

Table 2
青年期の心理的居場所感における性差の検討

| | 全体 | | 男性 | | 女性 | | *t* 値 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* | |
| 母親に対する居場所感 | 75.45 | 15.08 | 71.25 | 13.80 | 78.80 | 15.40 | -3.99 *** |
| 父親に対する居場所感 | 69.23 | 17.01 | 67.65 | 15.29 | 70.88 | 18.17 | -1.46 |
| 親友に対する居場所感 | 79.25 | 13.57 | 75.26 | 13.44 | 82.41 | 12.71 | -4.28 *** |
| 恋人に対する居場所感 | 77.99 | 16.78 | 75.42 | 14.51 | 79.74 | 18.36 | -1.09 |

*$p$ <.05, **$p$ <.01, ***$p$ <.001

**1-4) 異なる心理的居場所間同士の関連**

異なる心理的居場所間同士の関連を検討するため，相関分析を行った (Table 3) 。その結果，父親と母親，父親と親友，父親と恋人，母親と親友，母親と恋人，親友と恋人に対する心理的居場所感の全てで有意な正の相関が見られた。さらに，母親に対する心理的居場所感を統制した偏相関分析を行った (Table 3) 。その結果，親友と恋人に対する心理的居場所感に有意な正の相関が見られた。これらのことから，母親に対する心理的居場所感が心理的居場所の広がりにおいて重要であることが示唆された。しかしながら，母親に対する心理的居場所感の高さに関わらず，親友に対する心理的居場所感が高い程，恋人に対する心理的居場所感は高くなることも示唆された。このことは，たとえ幼時期以降の母親との関係性が悪く母親に対する心理的居場所感が低くとも，親友が心理的居場所となるような関係性を持つことができれば，そこから恋人へと心理的居場所が広がっていく可能性を意味する。

Table 3
異なる心理的居場所間の相関

| | 対母親 | 対父親 | 対親友 |
|---|---|---|---|
| 対母親 | | | |
| 対父親 | .65** | | |
| 対親友 | .58** | .47** (.11) | |
| 対恋人 | .49** | .47** (.19) | .48** (.35**) |

*$p$ <.05, **$p$ <.01

注) ( ) 内は，母親に対する心理的居場所感を統制した偏相関を示している。

**2) 心理社会的発達**

**2-1) 因子構造の確認**

EPSI の下位尺度のまとまりを検討するために，下位尺度ごとに成分を 1 に指定した主成分分析を行なった。その結果，共通性の著しく低い 9 項目を分析から除外した。

**2-2) 信頼性の検討**

EPSI の信頼性を検討するため，Cronbach の α 係数を算出した (Table 4) 。その結果，全体的にやや低い信頼性が得られた。

Table 4

EPSIの平均値と標準偏差

| | | *M* | *SD* |
|---|---|---|---|
| | 信頼性 (α = .68) | 19.08 | 3.75 |
| | 自律性 (α = .73) | 14.52 | 3.60 |
| E | 自主性 (α = .51) | 20.71 | 4.37 |
| P | 勤勉性 (α = .64) | 19.40 | 3.38 |
| S | 同一性 (α = .69) | 23.65 | 4.25 |
| I | 親密性 (α = .67) | 20.66 | 3.83 |
| | 生殖性 (α = .65) | 18.52 | 3.74 |
| | 統合性 (α = .62) | 12.95 | 3.01 |

**2-3) 青年期の EPSI における性差の検討**

青年期のEPSIの各得点の性差の検討を検討するため，*t* 検定を行った (Table 5) 。その結果，総得点と「信頼性」「同一性」「親密性」の得点では，女性の方が有意に高かった。このことは，女性の方が全体としての心理社会的発達の程度が高いこと，特に「信頼性」「同一性」「親密性」の発達レベルが高いことを示唆している。これは，中西ら (2001) の女性の方が「信頼性」「統合性」の発達レベルが高く，男性の方が「自主性」「生殖性」の発達レベルが高いという結果とは一部，異なるものである。杉村 (1998) によると，関係性は男子にも女子にも重要であるが，男子は他者との競争，女子は愛着と親和というように，関係性の中でも重要な側面が異なる。したがって，女性の方が「信頼性」「親密性」の発達レベルが高かった理由としては，「信頼性」や「親密性」は関係性の中でも愛着や親和といった側面と深く関連していることが考えられる。しかしながら，中西ら (2001) の結果と異なる「自主性」「同一性」「生殖性」「統合性」の発達レベルにおける性差については，今後検討する必要がある。

Table 5

青年期のEPSIにおける性差の検討

| | 全体 | | 男性 | | 女性 | | *t* 値 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* | |
| 総得点 | 149.39 | 21.32 | 146.46 | 20.05 | 152.08 | 22.28 | -2.04 * |
| 信頼性 | 19.08 | 3.75 | 18.22 | 3.52 | 19.81 | 3.79 | -3.39 *** |
| 自律性 | 14.52 | 3.60 | 14.24 | 3.86 | 14.80 | 3.40 | -1.22 |
| 自主性 | 20.71 | 4.37 | 20.50 | 4.03 | 20.96 | 4.67 | -.83 |
| 勤勉性 | 19.40 | 3.38 | 19.23 | 3.34 | 19.58 | 3.45 | -.80 |
| 同一性 | 23.65 | 4.25 | 22.98 | 4.04 | 24.14 | 4.43 | -2.13 * |
| 親密性 | 20.66 | 3.83 | 19.77 | 3.67 | 21.48 | 3.79 | -3.58 *** |
| 世代性 | 18.52 | 3.74 | 18.72 | 3.81 | 18.40 | 3.76 | .67 |
| 統合性 | 12.95 | 3.01 | 12.92 | 3.02 | 13.02 | 3.05 | -.27 |

$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

**3) 心理的居場所感と心理社会的発達の関連**

**3-1) 心理的居場所感と EPSI の相関**

青年期における心理的居場所感と心理社会的発達課題の達成感覚の関連を検討するため，心理的居場所感と EPSI の相関分析を行った (Table 6) 。その結果，父親，母親，親友に対する心理的居場所感と「統合性」を除く 7 つの下位尺度に有意な正の相関が見られた。また，恋人に対する心理的

居場所感と「信頼性」「同一性」「親密性」「生殖性」に有意な正の相関が見られた。さらに，母親に対する心理的居場所感を統制して偏相関分析を行った (Table 6) 。その結果，親友に対する心理的居場所感と「信頼性」「親密性」に有意な正の相関が見られ，恋人に対する心理的居場所感と「自主性」に有意な負の相関が見られた。これらのことから，母親に対する心理的居場所感は心理社会的発達において重要であること，母親に対する心理的居場所感の高さに関わらず，親友に対する心理的居場所感が高い程，「信頼性」と「親密性」は高くなること，恋人に対する心理的居場所感が高い程，「自主性」が低くなることが示唆された。Erikson (1950) の基本的信頼感は発達早期の母子関係の中で形成されるものであり，心理社会的発達課題は，その基本的信頼感を基盤として達成されていくものである。そのため，母親に対する心理的居場所感が心理社会的発達において重要であることは当然であると考えられる。また，母親に対する心理的居場所感の高さに関わらず，親友に対する心理的居場所感が高い程，「信頼性」と「親密性」は高くなることは，発達早期における母親との関係性が悪く，基本的信頼感や愛着をしっかりと形成できていなくとも，親友との関係性次第で，「信頼性」や「親密性」の発達レベルが高まる可能性があることが考えられる。

Table 6
**心理的居場所感とEPSIの相関**

| | 心理的居場所感 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 対母親 | 対父親 | | 対親友 | | 対恋人 | |
| 総得点 | .47** | .44** | (.14) | .53** | (.23*) | .27* | (.08) |
| 信頼性 | .44** | .47** | (.12) | .52** | (.23*) | .26* | (.13) |
| 自律性 | .23** | .19** | (.06) | .28** | (.11) | .13* | (.08) |
| 自主性 | .34** | .31** | (.08) | .35** | (.00) | -.04 | (-.25*) |
| 勤勉性 | .31** | .32** | (.17) | .34** | (.18) | .31** | (.21) |
| 同一性 | .38** | .31** | (.11) | .37** | (.16) | .29* | (.12) |
| 親密性 | .50** | .46** | (-.02) | .59** | (.32**) | .37** | (.21) |
| 生殖性 | .37** | .37** | (.11) | .45** | (.28) | .32** | (.22) |
| 統合性 | .01 | .06 | (.09) | .05 | (.07) | -.17 | (-.16) |

$*p<.05$，$**p<.01$

注) ( ) 内は，母親に対する心理的居場所感を統制した偏相関を示している。

## 研究 2

### 目的

本研究の研究 1 において，母親に対する心理的居場所感が心理的居場所の広がりや心理社会的発達において重要であることが示唆された。しかしながら，母親に対する心理的居場所感の高さや関係性の違いにより，その後の心理的居場所の広がりがどのように異なってくるかについて質的に検討した研究は見られない。そこで，研究 2 では，青年がこれまで，発達に伴ってどのような心理的居場所を持ってきたかについて，母親に対する心理的居場所感を軸に質的に検討する。

### 方法

**1) 調査対象者及び調査時期**

質問紙調査において面接調査への協力を依頼し，承諾した A 大学生，15 名 (女性 10 名，男性 5 名；平均年齢 20.60 歳，標準偏差 1.30) に面接調査を実施した。調査時期は，2010 年 9 から 11 月

であった。

**2) 手続き**

1 回 60 分から 120 分の半構造化面接を実施した。面接実施前に，本研究の目的，倫理的な問題の配慮について説明した。その上で，録音および筆記記録，研究結果の公表について承諾を得て，同意書に署名して頂いた。なお，本研究を実施するにあたり，広島大学教育学研究科倫理審査委員会の承認を得ている。

**3) 調査内容**

「これまでに人との関係の中で，ほっとしたという体験について，小さい頃のものから語ってください」と教示した後，対象者の自発的な語りを聞き，①心理的居場所である他者について，② ①との関係でほっとしたという体験について，③ ①との関係性についてという設定項目のうち，語られなかった項目について，適宜質問した。

**4) 分析方法**

①録音記録をもとに逐語記録を作成した。②心理的居場所である重要な他者との関わりに関する語りを内容別に要約し，発達段階，重要な他者別に整理した。要約数は幼児期 40 個，児童期 46 個，思春期 85 個，青年期 95 個の総数 266 個となった。③類似したものをグルーピングし，上位コードを作成，命名した。④上位コードから最終的なカテゴリの生成を行った。⑤信頼性を検討するため，臨床心理学を専攻する大学院生 2 名が，カテゴリの評定を行った結果，上位カテゴリの一致率は 96.62 %，下位カテゴリの一致率は 92.86 %であった。なお，分類が一致しない場合は，評定者と協議の上，分類を決定した。⑥調査対象者を母親に対する心理的居場所感により高群，低群に分類し，心理的居場所である重要な他者との関わりついて比較検討し，各群の心理的居場所の発達的変遷モデルを暫定的に作成した。

## 結果と考察

**1) 各発達段階における心理的居場所との関わり**

データ分析の結果，幼児期では，『上位カテゴリ』3 個，<下位カテゴリ> 5 個，児童期では，『上位カテゴリ』4 個，<下位カテゴリ> 10 個，思春期では，『上位カテゴリ』7 個，<下位カテゴリ> 16 個，青年期では，『上位カテゴリ』5 個，<下位カテゴリ> 15 個を生成した。各発達段階で重複している内容のカテゴリを整理すると，全体では『上位カテゴリ』8 個，<下位カテゴリ> 19 個となった (Table 7) 。以下，カテゴリ名を示すときには，『 』，<> を付す。

幼児期から青年期までの心理的居場所である重要な他者との関わりを概観すると，発達に伴い心理的居場所である重要な他者との関わりは多種多様になっていくことが示唆された。また，全ての発達段階を通して，<見守られ感>や <相互交流> を含む『肯定的関わり』が見られることや，幼児期における心理的居場所である重要な他者との関わりとして，『肯定的関わり』が主なものであったことから，『肯定的関わり』は心理的居場所の発達的な広がりの基盤となっていると考えられる。

Table 7
心理的居場所との関わりについてのカテゴリの特徴

| カテゴリ 上位 | カテゴリ 下位 | 上位コード | 特徴 | 発達段階 |
|---|---|---|---|---|
| 肯定的関わり | 見守られ感 | 好意・大切に思われる/気にかけてくれる/頼る・守ってくれる/味方になってくれる/明るい・優しい・穏やか/関心を持ってくれる/甘えさせてくれる/分離不安と安心/一緒の空間に存在する/心配してくれる | 重要な他者に気にかけてもらったり，守ってもらうといった肯定的な関わり。 | 幼児期～青年期 |
| | 代償的な居場所 | 補助的な拠り所/比較した結果の拠り所/他の重要な他者からの逃げ場 | 他の重要な他者と比較して妥協して選んだ拠り所や，本来拠り所となるべき重要な他者からの逃げ場としての拠り所。 | 幼児期 |
| | 相互交流 | 日常会話/一緒に遊ぶ・出かける/遊びに夢中になる/一緒にいる・一緒にいて楽しい/顔を合わす | 重要な他者と一緒に遊ぶ，会話をするなどの肯定的な関わり。 | 幼児期～青年期 |
| 受容的関係 | 受容 | 受け入れてくれる | 自分を守ってくれる存在である重要な他者がありのままを受け入れてくれる。 | 幼児期 |
| 他者意識のなさ | 他者意識のなさ | 意識せずに一緒にいる | 一緒にいる重要な他者について意識することがない。 | 幼児期 |
| 自己・他者理解 | 共通性 | 気が合う/性格の類似/否定的体験・感情の共有 | 重要な他者と性格が似ていたり，気が合うことで安心したり，楽しむことができる。 | 児童期～青年期 |
| | 相互理解 | お互いを理解している | お互いを理解していることに安心する。 | 思春期・青年期 |
| | 補償関係 | 違いによる補償 | 重要な他者と自己の違いを知り，その違いによって刺激し合ったり，補いあったりする。 | 児童期～青年期 |
| 所属感 | 所属感 | 集団の一員 | 集団の一員として属すことに安心する。 | 児童期・思春期 |
| 対等・共感的関係 | 認められる | 褒めてくれる/対等に向き合ってくれる/意見を肯定してくれる/対等な関係/価値を評価してくれる/信頼して任せてくれる | 重要な他者に対等な人間として認められる。 | 児童期～青年期 |
| | 必要とされる | 勉強で頼られる/役立ちたい/必要とされる | 重要な他者に頼られたり，重要な他者のために役立ったりしたい。 | 思春期・青年期 |
| | 頼る | 相談する/行き詰った時に頼る/頼りになる | 重要な他者に，悩みを相談したり，行き詰った時に頼る。 | 児童期～青年期 |
| | 安心して表出できる | 何でも話せる/不満を話す/気を使わない/自分を表現できる | 重要な他者に，思っていることを何でも話すことができる。 | 児童期～青年期 |
| | 協力関係 | 一緒に考える/一緒に頑張る | 重要な他者と一緒に考えたり，同じことに取り組んだりする。 | 児童期～青年期 |
| | 情緒的支え・受容 | 支え/支え合う/受け入れてくれる | 重要な他者に，受け入れてもらい，重要な他者に支えられたり，自身が重要な他者の支えになったりする。 | 児童期～青年期 |
| | 信頼関係 | 信頼できる/信頼される/信頼し合う/さらけ出してくれる | 重要な他者と信頼し合う。 | 思春期・青年期 |
| 依りかかる | 自己中心的な関係 | 必要とするときだけの関わり/一方的に求める/一方的に頼る/思い通りにしてくれる | 一方的に重要な他者に頼ったり，必要な時だけ関わったりする。 | 思春期・青年期 |
| | 依存 | 心理的に依存する | 重要な他者に心理的に依存する。 | 思春期・青年期 |
| 自己成長感 | 成長感 | 新しい自分を知る/性格が変わる/居場所の広がり | 重要な他者との関わりにおいて，新たに肯定的な自己を知る。 | 思春期・青年期 |

**2) 青年の心理的居場所の発達的変遷—母親に対する心理的居場所感の高さによる比較—**

**2-1) 青年の心理的居場所の発達的変遷モデルの作成**

面接協力者を母親に対する心理的居場所感得点の平均値を用いて，高群と低群に分類したところ，高群 8 名(平均値 84.38)，低群 7 名 (平均値 65.00) となった。各発達段階に母親に対する心理的居場所感の高群，低群で出現したカテゴリについて対象者別に検討した (Table 8～11) 。

そして，母親に対する心理的居場所感の高群，低群の青年それぞれの心理的居場所の変遷の仕方や各発達段階において見られた関わりの特徴から，青年の心理的居場所の発達的変遷モデルを暫定的に作成した。

Table 8
幼児期に各群で出現したカテゴリ

| カテゴリ | | 高群 | | | | 低群 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上位 | 下位 | 母親 | 父親 | 祖父母 | 友人 | 母親 | 父親 | 祖父母 | 友人 |
| 肯定的関わり | 見守られ感 | **6** | 1 | 2 | 1 | **4** | | 1 | |
| | 代償的な居場所 | | | 2 | | 1 | | 1 | |
| | 相互交流 | 2 | 1 | 2 | 1 | | | | 2 |
| 他者意識のなさ | 他者意識のなさ | | | 1 | | | | | 1 |
| 受容的的関係 | 受容 | 1 | | 1 | | 2 | | | |

Table 9
児童期に各群で出現したカテゴリ

| カテゴリ | | 高群 | | | | 低群 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上位 | 下位 | 母親 | 父親 | 祖父母 | 友人 | 母親 | 父親 | 祖父母 | 友人 |
| 肯定的関わり | 見守られ感 | **4** | | 1 | 1 | 2 | | | 1 |
| | 代償的な居場所 | 1 | 1 | | | | | | |
| | 相互交流 | | | | **6** | | | | **3** |
| 自己・他者理解 | 共通性 | | | | 1 | | | | |
| | 補償関係 | | | | 1 | | | | 1 |
| 所属感 | 所属感 | | | | 1 | | | | |
| 対等・共感的関係 | 認められる | | 1 | 1 | | | | | |
| | 頼る | 1 | | | | | | | 1 |
| | 安心して表出できる | | | | 2 | | | | 2 |
| | 協力関係 | 1 | | | | | | | |
| | 情緒的支え | 1 | | | 2 | | | | |

Table 10
思春期に各群で出現したカテゴリ

| カテゴリ | | 高群 | | | | | 低群 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上位 | 下位 | 母親 | 父親 | 祖父母 | 友人 | 教師 | 母親 | 父親 | 祖父母 | 友人 |
| 肯定的関わり | 見守られ感 | 2 | 1 | | **4** | 1 | | | 1 | 1 |
| | 相互交流 | 1 | | | 1 | | | | 1 | 1 |
| 自己・他者理解 | 共通性 | | | | 2 | | | | | **3** |
| | 相互理解 | | | | 1 | | | | | 1 |
| | 補償関係 | | | | 1 | | | | | |
| 所属感 | 所属感 | | | | 1 | | | | | |
| 対等・共感的関係 | 認められる | 1 | 1 | 1 | | | | 1 | | |
| | 必要とされる | | | | 2 | | | | | 1 |
| | 頼る | | | | 1 | 1 | | 1 | | |
| | 安心して表出できる | | | | **5** | | | | | **5** |
| | 協力関係 | 1 | | | | | | | | |
| | 情緒的支え・受容 | 1 | 1 | | **3** | 1 | | | | **3** |
| | 信頼関係 | | | | **3** | | | | | |
| 依りかかる | 自己中心的な関係 | | | | | | | | | 2 |
| | 依存 | | | | | 1 | | | | 1 |
| 自己成長感 | 成長感 | | | | 1 | | | | | 1 |

Table 11
青年期に各群で出現したカテゴリ

| カテゴリ | | 高群 | | | | 低群 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上位 | 下位 | 母親 | 父親 | 友人 | 恋人 | 母親 | 父親 | 友人 | 恋人 |
| 肯定的関わり | 見守られ感 | | 2 | 1 | 1 | | | **3** | **4** |
| | 相互交流 | 2 | 2 | **4** | 1 | | | | |
| 自己・他者理解 | 共通性 | | | 3 | | | | | 1 |
| | 相互理解 | | | 3 | 1 | | | | 1 |
| | 補償関係 | | | | | | | | 1 |
| 対等・共感的関係 | 認められる | **3** | 2 | | | | | 1 | |
| | 必要とされる | 1 | 1 | 1 | | | | | |
| | 頼る | 1 | | 1 | 1 | | | 1 | |
| | 安心して表出できる | 1 | 1 | **5** | 1 | | | **3** | 2 |
| | 協力関係 | | | 1 | | | | | 1 |
| | 情緒的支え・受容 | | | **4** | 1 | | | 1 | 1 |
| | 信頼関係 | | | **3** | 2 | | | | |
| 依りかかる | 自己中心的な関係 | | | | | | | **3** | 1 |
| | 依存 | | | | | | | | 1 |
| 自己成長感 | 成長感 | | | | | | | 2 | 1 |

注1) 表中の数字は各下位カテゴリに出現した人数を示す。その人数が3名以上の場合，太字にしている。
注2) 二重枠線部分は一方の群のみに，出現した下位カテゴリを示す。

**2-2) 母親に対する心理的居場所感の高い青年の心理的居場所の発達的変遷**

Figure 1は，母親に対する心理的居場所感が高い青年の心理的居場所の発達的変遷モデルである。高群では，幼児期から青年期にかけて，母親を始め，友人，恋人と心理的居場所が広がり，層的に重なっている。また，各発達段階における心理的居場所である重要な他者との関係が，学校が変わったり，離れたりしても維持され，時には後の発達段階においても，重要な心理的居場所として機能していることが特徴的である。住田 (2000) によると，子どもはそれぞれの生活領域において居場所をもっているほどに安定的に発達していく。高群では，家族や家族以外の学校など，各生活領域において心理的居場所を持ち，これは，彼らの安定的な発達にとって重要であると考えられる。

幼児期，児童期において母親や父親との関係では，<見守られ感> によって安心感を得ている。また，思春期では子どもの自立に伴う反抗によって一時的に親子関係に距離は出来るものの，完全に切れることなく繋がっている。佐藤 (2006) によると，保護された環境 (家庭) から学校へと出ていく児童期では，学校などで心に傷を受けて帰宅した子どもを，どのように迎えるかが重大な問題となる。子どもの発達状況と受けた傷の深さを見極めて対処する賢さが親に求められる。こういった意味で，児童期の <見守られ感> は重要であると考えられる。また，富永・北山 (2003) によると，心理的離乳に伴い，家庭，家族における「居場所」が危機的な状態になったとしても，家庭は重要な「居場所」であり続ける。したがって，思春期において，母親や父親の心理的居場所としての機能は弱まるものの，その役割は重要であり，関係が繋がっていることが重要となると考えられる。青年期になると，反抗期も収まり，母親や父親の心理的居場所として再び機能するようになるが，幼児期，児童期の<見守られ感>から <認められる> ことへと重要な関わりが変化している。佐藤 (2006) によると，同一性の獲得や親からの心理的離乳が課題となる青年期では，親はわが子である青年を一人の大人と見て，できるだけその意思決定を尊重することが必要となる。また，青年にも，いつまでも親との関係で決めるのではなく自分独自で，あるいは友人との話し合いの中で決

断する自立性が要求される。このことからも，青年期において，家族が心理的居場所として機能するためには，親に対等な一人の人間として認めてもらうことが重要となると考えられる。

心理的居場所である友人との関係では，児童期では <相互交流> ，思春期では <見守られ感> <自己表現> <情緒的支え・受容> <信頼関係> ，青年期では <相互交流> <情緒的支え・受容> <信頼関係> が重要となっている。思春期では，心理的離乳に伴い母親や父親に対する心理的居場所感は弱まり，この時期に見られる心理的居場所は，友人のみになる。富永ら (2003) によると，高校生にとって友人との場面が，家庭での危機的な受容を特に支えている。この時期の発達課題の 1 つである親からの心理的離乳を達成するためにも，友人関係における，互いに対等であり，思ったことを何でも話すことができ，支え合ったり信頼し合ったりできるという関係性が重要となると推察される。

思春期以降に，友人や恋人との関係において <信頼関係> が見られることは，高群の特徴である。坂井 (2005) によると，児童期から青年期にかけて，子どもは自らの活動範囲を広げて多様な人と付き合うようになり，親よりもその人たちと過ごす時間が多くなっていく。このような対人関係の変化の中で，信頼感という対人関係の一面において親以外の人を親よりも重要視する傾向が出現してきたことは，青少年が家庭外での生活への適応や親からの自立に関して，順調な成長過程にあることを示す。したがって，母親に対する心理的居場所感の高い青年の，友人や恋人との信頼関係は，健康的な発達において，重要であると考えられる。

また，幼，児童期では母親，思春期では友人との関わりにおいて，<見守られ感> が見られ，幼児期から思春期まで<見守られ感>を継続して感じることができていることも高群の特徴である。このことについては，思春期になると，友人との関係性の中で，『「家族のいる居場所」では得られなくなった心理的機能を充足している』(杉本・庄司，2006) と考えられる。

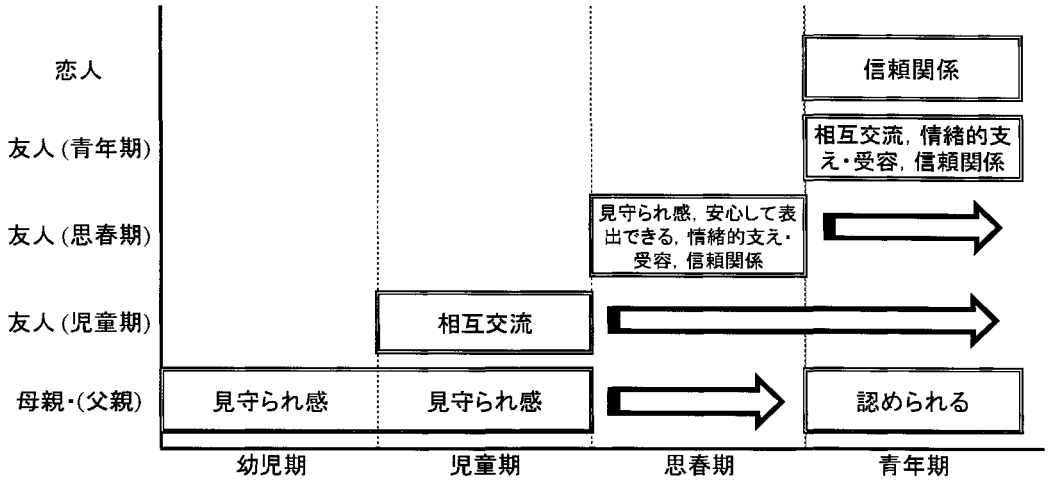


Figure 1. **母親に対する心理的居場所感が高い青年の心理的居場所の発達的変遷モデル**

**2-3) 母親に対する心理的居場所感の低い青年の心理的居場所の発達的変遷**

Figure 2は，母親に対する心理的居場所感が低い青年の心理的居場所の発達的変遷モデルである。低群では，全体的に心理的居場所があまり見られないことが特徴的である。高群では，母親や父親が心理的居場所として，反抗期である思春期を除いて，幼児期から青年期にかけて継続して機能していたのに対し，低群では幼児期に少しだけ，母親との間に<見守られ感>が見られるのみで，幼時期以降の発達段階では，母親や父親は心理的居場所としてほとんど機能していない。心理的居場所である友人との関係性を見ると，児童期では <相互交流> が少しだけ見られるだけである。思春期以降，心理的居場所として友人との関係性を持つ青年が増え，思春期では <共通性> <自己実現> <情緒的支え・受容> が重要であり，友人との関係の中で，共に否定的な体験があり，そのことについて話せることや，互いに性格が似ていること，情緒的な支えになることで，安心感を得ていることが示唆された。また，青年期において，友人との間では <見守られ感> <自己表現> <自己中心的な関係> が，恋人との間では <見守られ感> <自己表現> が重要であり，友人や恋人に大切にされたり，心配されたりすることや，友人との間で，何でも話したりでき，必要とするときだけ頼ったり，自分の思い通りにしてもらったりすることによって安心感を得ていることが示唆された。

高群では，思春期以降の友人や恋人との関係において <信頼関係> が見られているが，低群では全く見られていない。この理由として，母親との心理的居場所感の低い青年は，幼少期における母親との間に基本的信頼感を形成できず，「個」の発達における，「自己信頼　対　自己不信」と「関係性」の発達における「他者信頼　対　他者不信」 (岡本，2007) という発達課題を達成することができなかったことが考えられる。そのため，思春期以降，心理的居場所である友人や恋人との関係において自分自身を信頼してもらっているという感覚や，相手を信頼できるという感覚を持てないと推察される。

また，思春期以降の <自己中心的な関係> は低群にのみ見られる特徴である。母親との心理的居場所感が低い青年は，友人や恋人との信頼関係が築けないために，思春期以降，友人や恋人に対して，必要とするときだけ頼ったり，自分の思い通りにしてもらったりすることで，相手の自分に対する思いを試していることが推察される。しかしながら，このような関わりによって，心理的居場所である友人や恋人との関係性の継続が困難になる可能性が考えられる。青年が心理的居場所である重要な他者との信頼関係をもてないことによって，どのような問題があるか，検討する必要があると考えられる。

高群では心理的居場所である友人との関係性が離れても維持されていたが，低群では幼児期から思春期にかけて，クラスや学校が変わったり，喧嘩したりして関係性が途切れてしまう場合が多かった。しかしながら，思春期から青年期にかけては，友人との関係性が維持されていることが多かった。これは，児童期までのただ一緒に遊ぶだけでなく，思春期以降，これまでになかった，何でも相談したり話したりすることができる，情緒的支えや受け入れてもらうという体験をすることができたことが，次の発達段階における心理的居場所づくりの基盤になったと推察される。

高群では，幼児期から思春期まで<見守られ感>を継続して感じることができていたが，低群では幼児期から思春期にかけて<見守られ感>を感じることがなく，青年期において友人や恋人との関係

性の中で<見守られ感>が重要となっていることが特徴的である。母親に対する心理的居場所感の低い青年は，そもそも「家族のいる居場所」でほとんどの心理的機能を充足してくることができなかったと考えられるが，思春期の友人との関係性を基盤にして，青年期では，友人や恋人との関係において，幼少期に得られなかった <見守られ感>を充足することができるようになっている。こういった意味で，この時期の<見守られ感>は非常に重要であると考えられる。

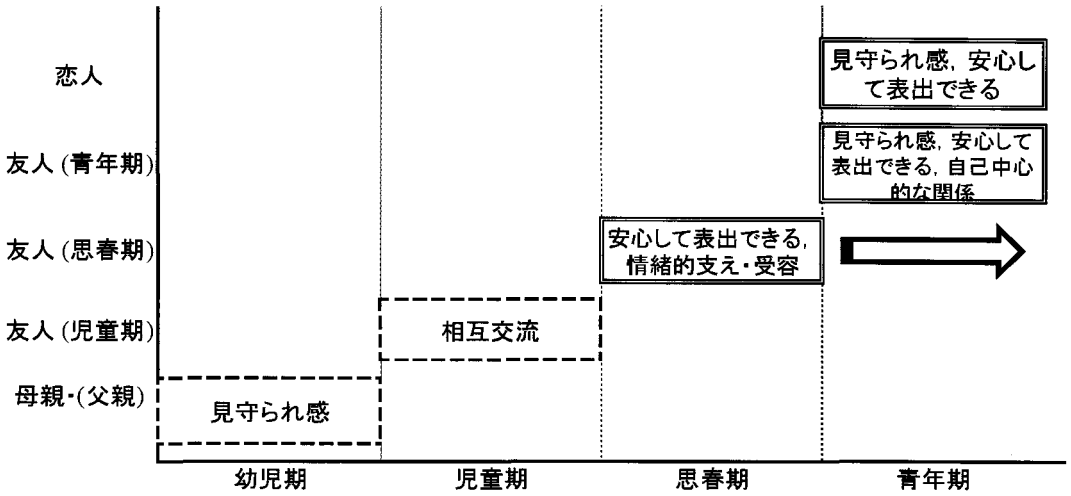


Figure 2. 母親に対する心理的居場所感が低い青年の心理的居場所の発達的変遷モデル

注) : 心理的居場所を示す。心理的居場所との関係性の特徴を記している。
: 安定した心理的居場所が少ないことを示す。
: 前発達段階における心理的居場所との関係が維持されていることを示す。
友人 :( ) 内の時期は，友人と出会った時期を示す。

## 総合考察

### 1) 本研究で得られた知見

本研究の目的は，青年期を対象とし，最初の心理的居場所となる母親を始め，発達に伴いどのような心理的居場所を持ってきたかについて調査し，心理社会的発達の視点から検討することであった。

数量的検討を行った研究 1 では，母親に対する心理的居場所感が心理的居場所の広がりや心理社会的発達において重要であることが示された。

研究 2 では，青年がこれまで，発達に伴ってどのような心理的居場所を持ってきたかについて，母親に対する心理的居場所感を軸に質的に検討し，心理的居場所の発達的変遷モデルを暫定的に作成した。その結果，幼児期における母親との会話や一緒に遊んでもらう体験や，気にかけてもらったり，守ってもらったりすることにより安心感を得ることを通して，基本的信頼感や愛着がしっか

りと形成されている青年は，幼児期以降，友人，恋人と心理的居場所が広がっていくことが示された。また，母親に対する心理的場所感が低い青年では幼児期，児童期にほとんど心理的居場所が見られないが，思春期から青年期にかけて，友人や恋人が心理的居場所として機能するようになっていることが示唆された。子どもたちにとって身近な環境である家族という関係性の中で，心理的居場所感を感じられるようにしていくことはもちろんであるが，同時に心理的居場所の広がりに繋がるよう友人との関係性を大切にしていく必要があると考えられる。

また，母親に対する心理的居場所感が高い青年は，幼児期から思春期まで<見守られ感>を継続して感じることができていたが，母親に対する心理的居場所感が低い青年は，幼児期から思春期まで，ほとんど得られなかった<見守られ感>を青年期において，友人や恋人との関係性の中で充足していることが示唆された。母親に対する心理的居場所感の高い青年では，幼児期から思春期まで母親から友人へと移り変わりながらも<見守られ感>が継続していることによって，各発達段階のける発達課題に取り組む支えとなっていると考えられる。一方，母親に対する心理的居場所感の低い青年では，幼児期から思春期にかけて，発達課題に取り組む支えとなる<見守られ感>をほとんど感じることがないため，各発達段階における発達課題の達成レベルは低くなっていると考えられる。しかしながら，思春期以降，友人や恋人との間で<見守られ感>を充足できるようになり，発達早期から達成できずにいた発達課題に再度取り組むことができるようになる可能性が考えられる。

**3) 本研究の限界と今後の課題**

本研究では，「心の拠り所となる関係性，および，安心感があり，ありのままの自分を受容される場」とする心理的居場所の関係性の側面のみを扱った。しかしながら，青年がどのような心理的居場所によって支えられ，発達課題に取り組んできたかについて検討するためには，今後，他者との関係性から切り離されているタイプ（例えば，一人で趣味に没頭する時間や場所など）も含めて検討する必要がある。

また，研究 2 で用いた質的分析の方法は，現在のところ確立されたものとは言い難く，本研究で得られた結果は，仮説モデルとしての意味合いが大きい。今後，質的研究をさらに進めることが求められる。また，本研究から得られた知見を，心理臨床場面において，心理的居場所の問題を抱える人の理解や心理的アプローチに繋がるよう，発展させていくことは重要な課題である。

## 引用文献


Erikson, E. H. (1950). *Childfood and society* New York W.W.Norton
(仁科弥生（訳）(1977，1980). 幼児期と社会 1・2 みすず書房)

村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文 (2000). 居場所を見失った思春期・青年期の人々への統合的アプロ―チ 通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因 心理臨床学研究，**18**，221-232.

中西信男・佐方哲彦 (2001). EPSI―エリクソン心理社会的段階目録検査― 上里一郎（監） 心理アセスメントハンドブック 西村書店 pp.365-376.

則定百合子 (2007). 青年期版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会第 26 回大会発表論文

集，475.
則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達的変化　カウンセリング研究, **41**, 64-72.
岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開　ミネルヴァ書房
岡村季光・豊田弘司 (2007). 「居場所」(安心できる人) を規定する要因内的作業も出るによる検討　日本教育心理学会総会発表論文集，**49**，126.
佐藤　誠 (2006). 親子関係の心理　岡堂哲雄 (編) 家族心理学入門　培風館　pp.45-56.
杉本希映・庄司一子 (2006). 「居場所」の心理的脳の構造とその発達的変化　教育心理学研究, **54**, 289-299.
住田正樹 (2000). 子どもの発達と子どもの居場所　藤竹　暁 (編) 現代のエスプリ別冊　生活文化シリーズ 3――現代人の居場所――　至文堂　pp.10-15.
高橋昌子・米川　勉 (2008). 青年期における「居場所」研究　福岡女学院大学大学院紀要 : 臨床心理学，**5**, 57-66.
富永幹人・北山　修 (2003). 青年期と「居場所」　住田正樹・南　博文(編)　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版　pp.381-400.
堤　雅雄 (2002). 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱　島根大学教育学部 (人文・社会科学) **36**，1-7.